

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.14

新年明けましておめでとうございます。

年明けの楽しみは何と申しても御節に好物の甘酒と申しあげたいのですが、やはりここは甘酒よりもお屠蘇でございますな。

市民様のお屋敷でもお正月をゆるりと楽しんでおられるようで、番小屋では旦那様と私ご助も年の初めをのんびりと祝いたいものじゃと、先ほどから加賀鳶の純米をチビチビと楽しんでおりましたのじゃ。

下戸の旦那様は早々にお屠蘇を切り上げられ、昆布締め鯛に雑煮の餅を5、6個も平らげられると、新春恒例の大型時代劇「大忠臣蔵」を見ながらこっくり、こっくりと舟をこぎ出しておられます。



私へと申せば旦那様の残されたお屠蘇をも飲み干し、仕方なく雑煮をと出汁の
入った鍋に餅を5個ばかり放り込むと火を着けたのじゃ。

が、そこはやはり左党の習性、まだまだ雑煮には早いと年末に旦那様が私か
ら取り上げてシンクの下の棚に隠されておった甘酒を引き出すと

「な、なに。一杯だけじゃ、一杯だけ。」と隠し飲みを始めてしまったのです
じゃ。

当然、一杯ですむ筈もなく2杯、3杯と過ごすうちに心地よくなりましたな。



「し、しかし甘酒とは良いもの不思議なものじゃな。シンクの下にあったせいか酔えば酔うほど醤油の煮える香ばしい匂いがしてきますなあ」と幸福に浸っておったのじゃが、

「うん？な、なにか醤油が焦げるくさい臭いが・・・。」と臭いの方を見やりますとガスレンジの雑煮の鍋からモクモクと黒い煙が！

「い、いかんっ。空焚きじゃ！」と叫べど、酔いで足腰がゆうことをきかぬ。



「た、大変じゃ、か、火事じゃあ。また番小屋が火事にいい・・・。」と這いながら何とかレンジにたどり着き、火を消しはしたが、鍋の雑煮は真っ黒け。

「こ、これはまずいの。旦那様に見られたらまた禁酒の誓いをさせられる。」
な、何とかせねばと酔った脳の命ずるままに鍋の中へと手を突っ込んだのです
じゃ。

「!!!うああちちいっ??」と焦げた雑煮の塊が手にくっつきましてな、
振り払おうと必死で手を振っておるうちに塊がヒュンと外れたのですよ。



「た、助かったあっ！」と私の安堵の声を上げると同時に・・・。

「うぎゃああああ！」という断末魔の声を残して、旦那様が番小屋から飛び出して行ったのじゃ。



な、何事か？と、すぐさま私も旦那様を追いかけ外にでると、旦那様が降り積もった雪の中に兜ごと頭を突っ込んでおられたのじゃ。



「だ、旦那様どうされましたい？あ、赤穂の討ち入りですかい？」とお聞きすると、

「た、たわけがっ。いくら忠臣蔵を見ておっても夢と現の区別ぐらいつくわいっ！ううううっ、気持ちよく寝ておったのに急に熱いものが顔に飛んで来たのじゃ。」と兜を雪の中から抜き、振り返った旦那様のお顔を見て私は卒倒したのですじゃ。

「!!!?ひいいいーっ、お、お助けをっ!」とその場にひれ伏した私の前には、この世の物とは思えぬ鬼が立っておった。



「だ、旦那様。も、もう甘酒を呑みたいとか煙草が欲しいとか給金を上げろとか美味しいものが食べたいとか仕事がきついとか汚い仕事は嫌だとか面倒くさいとかテレビが見たいとか夜更かししたいとか歯を磨きたくないとか風呂に入りたくないとか甲冑が着たいとか新しい草履が欲しいとか言いません。し、市民家の皆様の安全のため一心不乱、一所懸命に働きますのでどうか、どうか喰わないでください!!」と叫んでおったのですじゃ。

「ようもそんなに沢山の不満が言えたものじゃの。急にどうしたのじゃご助？

まあ、年頭の誓いにしては十分じゃがの。」と何時もの旦那様の声につられ、

「だ、旦那様・・・は・・・鬼・・・だったんですかい？」と恐るおそるお聴

きすると、

「鬼？何じゃそれは？しかし寒くなったな。どれトイレトイレ。」と鬼、いえ、

旦那様は家の中へと入っていったのじゃ。

「ううう、こ、恐いのお・・・。わ、儂がまじめに働かんかったから懲らしめ

るために旦那さまは鬼になったに違いないわい。こ、恐いのお・・・。」と私

は玄関の戸口にしがみついたまま、おびえて番小屋の中には入れなんだのじゃ。

が・・・その時、



「うぎゃあーっ、も、もっと長正殿が食べたいとか福梅の餡だけ食べたいとか玉露が飲みたいとか新しい机が欲しいとかソロバンは嫌いとか習字で遊びたいとか衛星放送が見たいとか新しい甲冑が欲しいとか夜食はカップヌードルが良いとかピーマンは食べられないとか言いません。し、市民家の皆様の安全のため一心不乱、一所懸命勤めますので、どうか、どうか、どうかあ、喰わないでください！！」とトイレで叫ぶ旦那様の声を聞きつけ、そしてトイレの中の鏡の前で泡を吹いて倒れた鬼、いえ、旦那様を見つけたのじゃ。

「・・・だ、旦那様・・・。ご自分が鬼じゃったことに驚かれて・・・うん？

こ、これは！」

よく見ると鬼の頭から伸びた髪が・・・良く見ると昆布のような・・・。

「も、もしかしたら・・・」と鬼、いえ、旦那様のお顔に触れてみれば、

「や、やはり雑煮じゃ。はああ、旦那様が鬼でのおうて良かった。」と雑煮を旦那様から引き剥がしたのじゃが、鬼の面の下から現れたのは

「お、おのれは・・・雑煮を・・・いかがしたのじゃ・・・。」と怒りで鬼の面

よりも怖いお顔をした旦那様のお顔でござった。



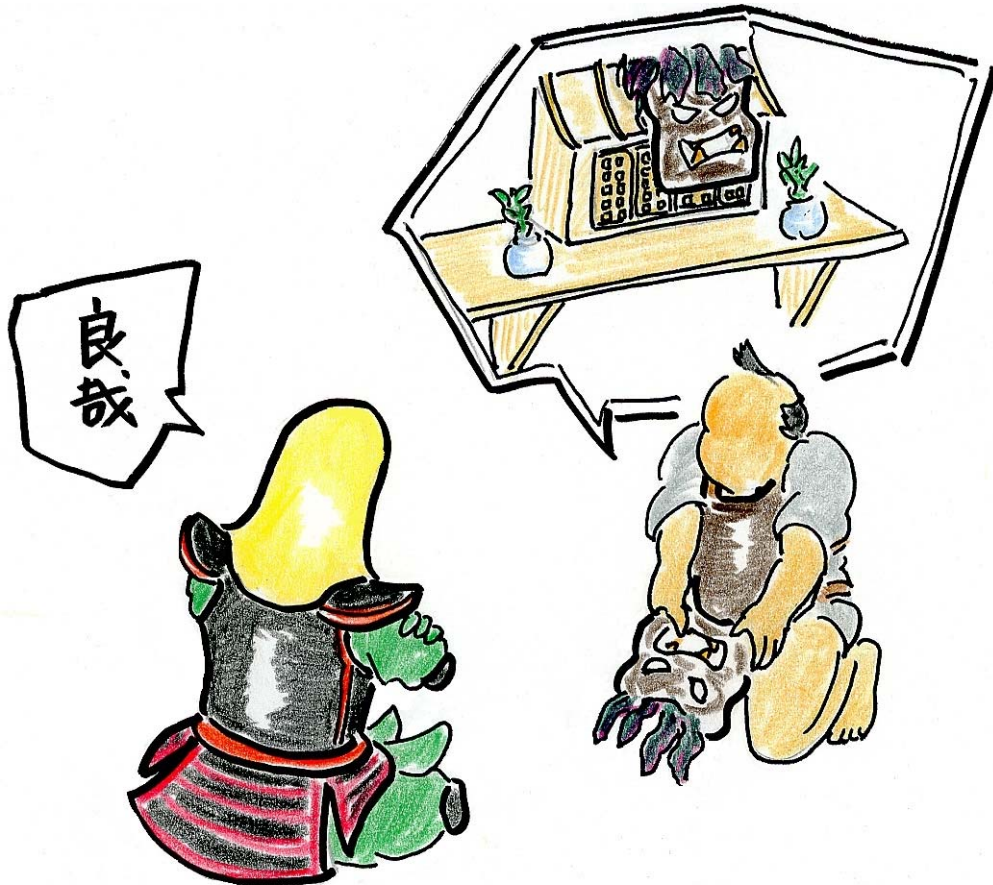
「ひっ、あっ、へっ・・・。だ、旦那様これには訳が・・・。」という私に
「わあけえ？言うてみい。拙者が納得できる訳なら許してつかわす。納得でき
なければ今年一年は禁酒禁煙じゃ。」と鬼が、

「せ、殺生でっせ。せめて一月いや半月・・・。」と言い募っておりますと
「馬鹿者っ、さっさと訳とやらを言わんかいつ。」と鬼に叱られやして、

「火、火除けの面を作ったのでございます。だ、旦那様のお顔が余りにも尊い
もので、お屋敷に飾る火除けのお面の型に拝借した次第ですう。お許し下さい
ましっ」と・・・。

口から出まかせを申しあげますと鬼の顔が、いえ、旦那様のお顔がみるみるい
つもの恵比寿様のようになり、

「何々、拙者の顔が余りにも尊いとな・・・。うん、許す。後でお屋敷の神棚にたてまつって来い。」と上機嫌で居間へと戻られたのですじゃ。



「咄嗟とは言え火除けの面とは良くゆうたものじゃ。儂の深酒とレンジの消し忘れが原因じゃが、大ごとになってしもうて、ほんに火災予防は油断大敵じゃのう。この面は神棚には上げられんし・・・どうしたものかのお。」
と鬼の面を手にして悩んでおったところへ、

『新日本紀行・・・。今日は石川県能登地区に・・・。あまめはぎの・・・。』

と NHK が。

私はその鬼の神事の映像を見てひらめいたのですじゃ。



(令和4年2月号につづく)